

令和5年度 第4回飯田市これからの学校のあり方審議会 会議録

開催日時	令和5年11月22日(水) 19:00~20:30
開催会場	飯田市役所 C311~C313 会議室
出席者	<p>審議会委員：後藤正幸、田添莊文、渡邊嘉藏、大場孝、小澤克平、玉置洋一、小林正彦、湯本正芳、山浦貞一、山崎久孝、河合一磨、齊藤達也、下平雅規 (オンライン) 井出隆安、坂野慎二</p> <p>オブザーバー：北澤正光(飯田市教育長職務代理) (敬称略)</p> <p>事務局：熊谷邦千加教育長、秦野高彦教育次長、福澤好晃学校教育課長 今井栄浩学校教育専門幹、麦島隆教育支援係長、仲田好寿保健給食係長 倉田奨教育企画係長、松下徹総括支援担当専門主査、 桐生尊義教育支援指導主事</p>
配布資料	<p>1 次第</p> <p>2 委員・事務局名簿</p> <p>3 報告・説明事項</p>
記録者	事務局 桐生尊義
<p>1 開会 (進行：学校教育課長)</p> <p>進行 皆さんこんばんは。若干定刻前でございますが皆さんお揃いですので、第4回の学校のこれからの学校のあり方審議会を始めてまいります。本日の出席状況でございますが、委員15名の皆様全員ご出席をいただいておりますので、本会議は成立をしている旨お伝えいたします。</p> <p>なお、毎回誠に恐縮でございますが、この審議会につきましては公開での開催ということにしておりまして、会議資料や委員名簿等飯田市の公式ウェブサイト上に掲載をいたしますのであらかじめご承知ください。また今回の審議会の会議録につきましても、審議会終了後、事務局でまとめたものを皆様方にご確認をいただき、確認が終わりましたら公開をいたします。公開にあたりましては、出席委員の全員の皆さんのご同意が得られた場合に限り発言した委員の氏名を記載するものとしておりますので、まずここで本日の会議録における発言委員の氏名の公開につきまして皆様方、ご同意をいただけますでしょうか？</p> <p>(異議なし)</p> <p>はい。ありがとうございます。それでは、会議内容の公開にあたりましては、発言された委員の方の氏名も併せて公表することといたしますのでご承知ください。それでは熊谷教育長よりご挨拶を申し上げます。</p> <p>2 教育長あいさつ</p> <p>改めまして皆さんこんばんは。また今日はだいぶ11月の末になってきて朝夕が寒くなって参りましたが、本当に日も暮れるのも早く、この時間になるとかなり遅い時間のような感覚に陥りますけれども、お仕事お疲れの中ご参加をいただきましてありがとうございます。またオンラインで前回直接おいでいただいたお二人の先生方にもご出席をいただきありがとうございます。よろしく願いいたします。</p> <p>この日も4回を数えまして、今年度もいよいよ方向性をご審議いただくそんな会議になってまいりました。その一方で10月1日現在の人口統計等を見ますと、この飯田市では15歳の年齢の</p>	

子供たちが925人いて、今年の0歳児の子供たちの数は622人というような報道をお聞きしております。その差は大体300人ということで、今の15歳、中学3年生あるいは高校1年生の年代の子たちから比べると3分の2の人数になっていくというふうになります。300人減るっていうことはなかなか大きな変化であり、この変化にどう対応していくかってことは、本当に今もそうですけども、さらに今後大きな課題になっていくなというふうにも改めて感じるところでございます。そういう時代も見据えながらこれからの飯田市の学校のあり方を今日もご審議をいただきます。ぜひいろんな視点からのご意見をいただければというふうに思っております。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

進行 3. 会長挨拶。 後藤会長よりご挨拶をいただきたくよろしくお願いいたします。

3 後藤会長あいさつ

こんばんは。ご多用の中、第4回審議会にご参集いただきまして本当にありがとうございます。リモートでご参加いただいている坂野委員さん、井出委員さん、前回大変お世話になりました。ありがとうございました。本日もどうぞよろしくお願いいたします。

前回は9月27日でございました。私そのときに秋の気配が感じられるようになりましたっていう時候の挨拶のようなのを冒頭申し上げました。それは気配だけでございました。初秋とか仲秋とか、晩秋というような日本の秋は、一体どうなってしまったのかなと思うこの2ヶ月ほどでございました。学校の校歌もたくさん作られていますし私がお世話になった学校の校歌も作曲された中田喜直っていう、本当に童謡いっぱい、皆さん方おそらく耳にすればいつでも思い出すような歌がいっぱいあると思うんですが、その方の曲に「小さい秋見つけた」っていうのがあって、これはもう私達はすぐ歌える歌だと思うんですが、小さい秋っていう表現が非常にずっと印象的でございましたが、今ネット上を見ると、大きい秋見つけたっていう、そういうようなものも出てきていて、小さい秋と大きい秋、ちょっと考えたときに、あれっと感じるこの2ヶ月でございました。皆さん口にする言葉は、そういう言葉じゃなくて、夏が長いとか、短い秋だなとか、長短で季節を捉えている感じがいたしました。なんか日本人の感性もおそらく影響を受けているだろうなと思いつつ、季節が変わってきているな、こんなふうに感じている次第であります。あえてここで冗談を言わせていただければ、日本の四季が怪しくなっていますが、国民や私達の士気は変わらずに大事にしていかなきゃいけないかなど。志を持って参りたいと思います。

本日次第にありますように、審議会のこれまでを振り返り、その上でたたき台についての意見交換を大事にしようという、そういう思いでおります。意見交換に時間をたっぷりかけたいと思いますけれども、委員の皆さんどうか積極的なご発言をよろしくお願いいたします。お世話になります。

進行 後藤会長ありがとうございました。それでは4の報告説明事項に移りますが、ここからの進行は後藤会長、よろしくお願いいたします。

4 報告・説明事項

後藤会長 それでは早速ですけども、次第の方にありますが、(1)第3回審議会までの振り返りを事務局からお願いをしたいと思います。

(事務局による報告・説明)

(1) 第3回審議会までの振り返り

事務局・倉田係長 学校教育課教育企画係の倉田と申します。それでは私から第3回審議会までの振り返りということでこれまでのまとめをご説明いたします。本日別綴じとしてあります資料No.15をご覧ください。第2回審議会までの振り返りは前回も行いましたけれども改めてご確認いただければと思います。特にポイントとなる部分にはアンダーラインを引いておりますので、その部分を中心にご確認いただきたいと思います。

それでは2ページをご覧ください。まず5月25日に行いました第1回審議会では、教育委員会から審議会へ諮問をしております、項目としては飯田市立小中学校のこれからの配置枠組みのあり方について、特色と魅力ある教育活動のあり方について、この2点を諮問をしております。また報告説明事項としまして、学校の教育環境の変化と課題、令和2年度からの検討経過、審議スケジュール案について御説明をしております。

3ページに第1回審議会の際に報告・説明をさせていただきました内容をまとめております。(1)の学校の教育環境の変化と課題については、児童生徒数の減少と学校施設の老朽化という背景、学校の役割について子供にとってのものと地域にとってのものがあるということ、そしてあり方検討の柱は特色と魅力ある学校作りと学校の配置枠組みでこれらを一緒に検討していくということをご説明しております。(2)令和2年度からの検討結果(3)審議スケジュールについてはお読み取りいただきたいと存じます。

続いて4ページをお開きください。第2回審議会を7月27日に実施をしております、報告・説明事項として保護者アンケートの結果についてと学級・学校の適正規模について、それから特色ある学校作り・魅力ある教育活動についてご説明させていただきまして、その後意見交換を行っております。

5ページからは第2回審議会の際に報告・説明させていただいた内容の要旨をまとめております。まず(1)の保護者アンケートの結果。こちらは令和4年度に実施いたしました保護者アンケートの結果についてですけれども、小規模な学校で学校の魅力として1人1人を大事にしてくれるという回答や地域との結びつきや学年を超えた交流が盛んという回答が多いということ、一方で学校の規模については小規模校で不満を感じている回答が多く、複式になる規模ではその傾向が顕著であること、学級数も小規模校、中規模校では現状より1学級程度多い規模を望む回答が多いこと、子供たちの教育環境の充実のための学校の統合等については「必要」「どちらか」という回答が全体の6割を超えていること、などとなります。(2)の学級学校の適正規模については、国や県が望ましいとしている規模、国では小学校で12学級以上、中学校で9学級以上が望ましいとしているのに対して、飯田市では小規模な学校が多いということ、また児童生徒数の減少とともに、今後も学級数が減少していくことが推定されることを説明してございます。(3)特色ある学校作り・魅力ある教育活動については、各学校運営協議会から出された様々な意見の中で特徴的な部分に触れさせていただいております。地域にある伝統や文化を特色

として生かすという意見や、地域の良さを感じてもらい県外に出ても将来戻ってきたいと思えるような取り組みを進めたいという意見、また学力に着目をした意見なども出されております。

6ページをご覧ください。第2回審議会の際の意見交換の内容をこちらにまとめさせていただいております。特に適正規模というところに関する意見を多くいただいております。大きすぎる学校や小さすぎる学校には課題があるのではないかという意見や、個別最適な学びという点では小規模校は良いが協働的な学びから言えばどうしても弱くなるという意見、市内に9つの中学校区があり、それぞれの地域特性に応じてどのような教育環境が望ましいのか市全体のイメージを構築することも重要、といった意見が出されております。7ページにもその続きを記載してございますが、義務教育である以上ある程度量と質が均一の水準の教育が保たれないといけないという意見や、学校は地域のよりどころであり核になるところ、学校学級の適正規模という視点だけで議論をしていくことはこわい、小規模であっても学校や地域の魅力を出して地域の教育をデザインしていく必要性はないのかというそういった議論が必要という意見、アンケート結果から学校と地域の結びつきが強くなり学校の活動も豊かになってきているということが読み取れてこれまでのコミュニティスクールの成果が出てきていると感じる、学校と家庭と地域の連携協働が大事で、そこから学校の特色作りに繋がっていくのではないかとといった意見が出されております。

続いて8ページからは9月27日に行った第3回審議会のまとめとなります。第3回審議会では飯田市の小中連携、一貫教育について報告・説明を行った後、井出委員、坂野委員のお2人から事例報告をいただき、意見交換をしております。

9ページをご覧ください。飯田市の小中連携・一貫教育についてですが、まず目的として子供たちの学力・体力の向上や生徒指導および不登校問題などの解決を目指して取り組んできているということ、そして12年間取り組んできた成果として、小中を通じて子供を育てるという教職員の意識の醸成や中学校区での具体的な連携の推進と確立、教育支援指導主事を中心とした小中で連携した不登校対応、地域と連携した中学校と中学校区独自の教育が上げられるといったことを説明しております。

10ページには井出委員からの事例報告の内容をごく簡単にまとめさせていただいております。井出委員からは、地域と協働する新しい学校作りと題して杉並区における学校と地域との協働についてご報告いただいております。杉並区において住みやすいまちを作っていくことを子供たちを育てるという観点から進めてこられたことをお話いただいております。このことを「良いまちは良い学校を育てる。学校作りはまち作り。」と表現されており、それを踏まえて杉並区小中一貫教育基本方針を策定したこと、そしてこの小中一貫教育で目指す効果を3つ挙げられておまして、検証した結果それぞれその3つの目指す効果についてそれぞれに効果があったと分析できること、飯田市の公民館、公民館主事や公民館長、学習グループを学校を支える地域の教育力に生かしては、ということをご報告をいただいております。

11ページには坂野委員からの事例報告の内容をごく簡単にまとめさせていただいております。坂野委員からは小中一貫教育が国の政策としてどのように広がり、どういった施設形態のものがあるのかという点を中心にご報告をいただきました。国がここ20年ほど義務教育というまとまりを意識しておりその中で小中一貫教育が進んできたこと、その目的として2014年の中教審答申から組織的・継続的な教育活動の徹底による教育効果の向上や子供たちの社会性の育成機能の

向上、いわゆる中1ギャップの緩和をはじめとする生徒指導上の諸問題の減少が挙げられていること等を紹介いただきまして、飯田市として小中一貫教育を進めていくとしたときには何を目的にするのが大事ということ、また教育の質を高めるという取り組みを進める場合に、特色を出すほど継続が難しくなること、継続のためには人的配置の部分で都道府県の支援が重要になること、さらに特色を出していくためには地域住民の協力も必要だが地域が持続的に協力できるやり方を考えていくことが重要であること、これらのことをご報告いただいております。

12 ページ 13 ページには第3回審議会での意見交換をまとめさせていただいております。第3回の意見交換では、主に井出委員、坂野委員の事例報告に関する質疑が中心となっております。地域のとらえ方ですとか地域の繋がり希薄化についての意見などが出されております。また特色・魅力ある教育課程を考えるには地域の協力が必要でキーパーソンやコーディネーターが大事という意見や、その学校が抱えている教育課題に対して何をすることが求められているかを明らかにし取り組んでいくことが、結果として学校の特色ある教育活動になるという意見も出されております。さらに飯田市として取り組んできているキャリア教育についても意見を出していただきまして、小中一貫とキャリア教育としてはふるさと学習も大事だが生き方教育としてのキャリア教育を重点的に進めることが有効と考えている、そういった意見も出されております。

大変雑駁なまとめとなりますが説明は以上となります。よろしく願いいたします。

後藤会長 ありがとうございます。今、3回の審議会までを振り返っていただきましたけれども、思い出すようなことがいくつかあったかと思えます。次の方へ行く前にやっぱりここでちょっと時間をとらせていただいて、今のこの3回までの審議会の中でまとめていただいた部分に関わって、質問でも結構ですし、ご意見でも結構でございますので、それこそどこからでも構いませんが、お話をいただけるとありがたいと思えますが、いかがですか。はいどうぞ。お願いします。

下平委員 下線を引かれているところ引かれてないところで、何か事務局の方で意図があつて下線を引かれているのでしょうか？

後藤会長 事務局いかがですか。

事務局・倉田係長 ご質問ありがとうございます。下線を引いた部分についてですけれども、この審議会の中で出されたご意見どれも非常に重要なものでありますけれども、特にこの今後のあり方に関する方針のたたき台を作るにあたってその参考にさせていただいた部分を中心にアンダーラインを引かせていただいたというところでございます。

後藤会長 下平委員さん、もしご意見等があるようならお話いただいた方がいいと思いますが、いかがですか。大丈夫ですか。他の皆さんいかがでしょうか？これまで3回かけて、昨年度、最初はアンケートから入り始めましたけど、前回までのところ、ほぼ報告いただいた内容、共有するってことでよろしいでしょうか？ はい、わかりました。ありがとうございます。

それでは3回までの審議については、みんなで共有できたということで、続いて(2)こちらが今日ほとんど時間を費やしたいと思っておりますが、飯田市立小中学校の今後のあり方に関す

の方針、たたき台ということでございますけれども、これについて事務局からまず説明をお願いしたいと思います。

(2) 飯田市立小中学校の今後のあり方に関する方針（たたき台）について

事務局・倉田係長 それでは飯田市立小中学校の今後のあり方に関する方針のたたき台をご説明いたします。本日、別綴じとなっております資料ナンバー2をご覧ください。それでは2ページをお開きください。

まずこちらには飯田市立小中学校を取り巻く背景を記載してございます。1点目としましては少子化に伴う児童生徒数の減少を記載してございます。平成18年度から見て令和5年度ではマイナス22.1%となっているということ、そして今後も毎年およそ190名ずつという急激な減少が続く見込みということをここに記載しております。またそれに伴いまして、学級数の減少も続くことになり、現状でも文科省が望ましいとしている学校規模よりも小規模な学校が多いのですが、それがさらに進むということになります。また2点目としましては学校施設の老朽化が進んでいるということに記載してございます。小中学校28校のうち12校は築50年経過、今後10年後には25校ほとんど全ての学校で長寿命化のための大規模改修や改築についての検討が必要な状況になってまいります。こういった背景がある中で学校のあり方検討が始まっているということになります。

続いて3ページをご覧ください。ここではこれまで飯田市が取り組んできた教育の特徴を整理させていただいております。まず1項目めとしましては、小中連携・一貫教育を推進してきているということを挙げております。こちらについては、小中学校の教職員間の相互理解を深め、教育活動における連携を充実させていくことで、個々の子供の状況に応じた適切な指導を行い、子供の確かな学びと成長を実現することを目的として行っているということになります。このことによりまして小中学校の教職員間での連携会議が行われ、児童生徒の交流活動も定着してきております。また中1ギャップによる不登校生徒の増加や中学進学後の学力の伸び悩みといった点でも課題が徐々に改善してきていること、系統的な教育実践、ふるさと学習を中核としたキャリア教育等も行われるようになってきているということを整理しております。

次に、2項目めとしまして飯田コミュニティスクールの推進を挙げております。この取り組みによりまして、地域人材を活用した教育活動の充実、地域資源を生かしたふるさと学習につながっているということをここに整理してございます。

3項目めとしましては飯田型キャリア教育を推進してきたことを挙げております。飯田型キャリア教育については中学校の職場体験からスタートしたものでありますが、その後ふるさと学習を中核に据えた小中学校のキャリア教育、さらには幼保小中高大と切れ目のないキャリア教育を推進するという形を目指してきているものでございます。

学校のあり方検討に当たっては、検討の柱とするテーマの1つに特色と魅力ある学校作りを据えておりまして、またこれまでの審議会の中でも、意見として9つの中学校区それぞれの地域特性に応じてどのような教育環境が望ましいのかといった意見、学校は地域にとってのよりどころで小規模であっても学校や地域の魅力を出していくという議論が必要といった意見、保護者アンケートの結果から学校と地域の結びつきが強くなり、学校の活動も豊かになっていることが読み

取れ、学校と家庭と地域の連携協働から、学校の特色作りにつながるのでは、といった意見が出されております。

こういった意見を踏まえまして、これまで取り組んできた教育の特徴をさらに発展させていくという観点で今後の方針のたたき台を整理したものが次のページとなります。4ページをご覧くださいと思います。今後のあり方としまして、現在の中学校区ごとの小中学校を小中一貫型の小中学校として9つの学園にするということをたたき台として考えておりまして、こちらについて議論をしていただきたいと考えております。このページの下の囲みの中、まず考え方や目指す姿についてですが、これまで取り組んできた小中連携・一貫教育をさらに確かなものとし、充実・発展させていくための配置枠組み、教育活動を目指していくということ、また義務教育9年間の一貫した学びと小中学校の垣根を越えた教職員の連携により学力向上等を目指すということ、飯田コミュニティスクールの取り組み、飯田型キャリア教育の取り組みを生かした特色ある学びを特設カリキュラムとして設定し、地域とともに進めていくということ、これらを目指していくということを考えております。

また2のところに施設の配置形態のことを記載してございます。当面は現状の学校施設を活用した施設分離型とし、今後の児童生徒数の推移や学校施設の改修・改築の必要性等を勘案し、地域特性等にも配慮しながら施設一体型や施設隣接型の整備も検討の選択肢を含めていきたいと考えております。またそれとともに、義務教育学校の選択肢も併せて検討するという考え方でございます。

次の5ページには、小中一貫教育の推進に向けた新たな学校形態を参考として記載しております。一つは小中一貫型の小学校・中学校、もう一つは義務教育学校ということになりますが、違いとしては、組織運営の部分ですとか必要な教員免許等、そういった部分では違いのある部分がありますけれども、どちらも共通する部分としては、教育課程として9年間の教育目標の設定ができることや9年間の系統性・体系性に配慮がなされている教育課程が編成できるということ、独自教科を設定することが可能ということ、施設形態としては一体型、隣接型、分離型があり得るということがあります。

次の6ページをお開きいただきたいと思います。6ページにはその学園のイメージを記載しております。先ほどの4ページでご説明した考え方や目指す姿と内容的には同じですが、真ん中の部分、基本理念としまして、一つには小中連携・一貫教育をより確かなものとし9年間の連続的な学びを充実すること、二つ目にはコミュニティスクールの仕組みを活用し、地域が参画・協働して地域の担い手を育むということ、三つ目には、飯田型キャリア教育等を生かした特設カリキュラムを設定し特色ある教育を行うこと、四つ目として小中学校の垣根を越えた教職員のチームとしての教育力を高めるということを挙げております。特に小中連携・一貫教育、これまで進めてきた部分でありますけれども、それをより確かな仕組みとするということについて、教育委員会規則により学園を規定することによって、小中一貫型の小中学校という仕組みをしっかりとしたものとする、そういったことを想定しております。

続いて7ページをご覧くださいと思います。7ページにはこの9つの学園を作る構想全体の概念図を記載しております。右上のところに目的を整理しておりますが、確かな学力、生き抜く力を育むということとともに地域の将来の担い手を育むということ、また中ほどに5つのつな

がりという言葉に記載しておりますが、こういったつながりを作り出すことを目指していくものでございます。

下の方には飯田型キャリア教育の内容を記載しております。飯田型キャリア教育で進めていく内容は、ここに記載してあります通り、自ら主体的に生き方を切り拓き、人とつながり生きる力を備え、ふるさとを心根において未来の地域の担い手や支え手となる人、学校と地域・家庭が協働して育むということ、また地域の資源や課題を学習教材に子供たちが多様な人と関わりながら実体験を通じた探究的な学びを行うこと、そしてこの飯田型キャリア教育は小中学校だけではなく、認定こども園・保育園での学びから小学校・中学校・高校、その先は高等教育機関まで発達段階に応じて切れ目なく続いていくということをここに示しております。

私からの説明以上となります。よろしくお願いいたします。

後藤会長 ありがとうございます。それではこれから時間をかけて、皆さま方、もちろん聞きたいことは当然ですし、お考えもあろうかと思っておりますので、率直にご発言をいただきたいと思いますが、どこからというのちょっとあれですので、まず最初にそのたたき台と言われるところに入るまでの、最初の1枚2枚と言ったらいいのでしょうか、ちょっと見ていただいて、2ページ、3ページにあたる部分ですね。まず背景こういう捉え方しているよということ、それからこれまでも審議会で出てきたことですが、特徴をこの3本で考えていること、ここの1、2ページ、3ページのところで思うところ、感じることを聞きたいことございませんか。いかがでしょうか？ ちょっと指名も変ですけど、先ほど下平さんがご発言されましたが、齊藤さんあたりどうですか。1、2ページあたりでどうですか？

齊藤委員 3ページ目の小中連携・一貫教育の推進というところで、中1ギャップによる不登校生徒の増加や中学校進学後の学力の伸び悩みといった課題が徐々に改善っていうふう書いてあるんですけど、不登校の生徒とかが今多分多いと思うんですけど、どのように対応して不登校の生徒が登校するようになったのか、わかっていけば教えていただいてもいいですか。

後藤会長 小中一貫教育というこの12年間続けてきてるんですよね。ここでの関係なんですが、その現状をまず聞きたいと。ちょっと他にございます？関連していかがですか。小中一貫について。

山崎委員 遠山中学校のPTA会長の山崎です。今の関連したことで、中学校の学力が伸び悩みといった課題が徐々に改善と言ってますけども、私ちょっと耳にしたんですけども、今年の中学校の平均的な学力は過去最低だっていうふう聞いたんですけど、その辺どうなんかなと思って。実際こうやって一生懸命やっただけのはいいんですけど、今の現段階で一体どうなのかって非常に親としては心配になります。校長先生は自ら学ぶことを率先させてやっってますって言われるんですけど、基礎学力の前に自らを構築して前進するなんてことは果たしてできるのかと。いろんな議論もしたこともあるんですけど、実際もう少しその辺は教育委員会も真摯に受けてやった方がいいと思うんですけど。緑ヶ丘中が今回一番良かったという話も聞かれる。先生の指導の違いでこう出てくるのか、そういうのがあるのか、そんなところもあるんですけども、なんか話を聞いていると、

守りなんですよ、これ。少子化、生徒数減少もそうだけど、実際は確かにこうなんだけど、だ
けどこれに対して守りましょう、規模を縮小しましょう、そんな形態でどんどん推移しているん
だけど、これに対してどういう教育として持っていくかというそういう前向きな話の一つも出て
こない。だからそこが本当我々父兄としてはイライラするところなんだけど、やっぱり産めや育て
るやとか、そういう話が出てもいいじゃないですか。教育の中に家族は大事だという話が。その
ために「結いタイム」とかやっているわけでしょ。家族を大事にしない、家族はいいもんだっ
ていうふうにやるときは今じゃないの。そういうふうにやってる割には、何か知らないけど、全
体的に後ろ向きなような気がしてしょうがないんだけど、すいません、以上です。

後藤会長 はい、ありがとうございます。いろいろ思うところ感じるところを出していただきま
したが、今ちょうど直接関わっている保護者であったり、皆さんなんですけど、河合委員さんあ
たりはどうですか。特にご意見ありますか。小中一貫に関してであります。

河合委員 特に今のところはあります。

後藤会長 そうですか。ありがとうございます。それでは一旦ここでちょっと多岐にわたる部分
もありましたけれど、ここで事務局の方でお願いできますでしょうか？

事務局・今井学校教育専門幹 小中連方を担当しておりますので、私の方から少しお話させていた
だければと思います。まず中1ギャップそれから不登校生徒に関わる部分ですが、小中連携・一
貫教育は平成23年度から始まっております。そこに関わるような形で、ご退職になった校長先
生方等を中心に教育支援指導主事という形で各学校へ、当時ですと不登校生徒が多かった学校を
中心に教育指導支援主事の先生方に入っただいて、学校に出てこれない子供の家庭訪問をし
たりとか保護者に会ったりとかというような活動を続けてくることで、不登校数の在籍数はかな
り減少をしていました。そういった中で小学校でも不登校というようなことが出てきましたの
で、各中学校区に支援主事の先生が配置され、中学校区を中心に小学校にも行って小中連携を進
めながら不登校の保護者、不登校になるとやっぱり兄弟で不登校という場合も出てくるもの
ですから、そうすると小学校も中学校も連携して情報交換しながら対応するというような形で、ある
程度一定数の改善は見られたかなと思います。ただ、不登校に関して言いますと、コロナ禍の令
和2年度あたりからまた増加しているという、新たな傾向が今出てきております。

それから中一ギャップについては支援主事の先生方を中心に小中を繋げていただいたので、6
年生が中学に来るという機会が、中学の様子を見るという機会がぐっと増えました。実際に私が
学校にいたときに、小中連携が始まる前ですと、例えば文化祭、中学の文化祭に近くの小学校の
6年生には案内が出ているんですけど、遠くの、あるいは遠くの一部しか来ない小学校には案内
が出ていなかったというのが現実には小中連携が行われる前にはありました。そういったところ
をきちんと整理して、中学校に行く小学校には全部同じように案内を出し来てもらってというよ
うな形でいろんなことが小中連携をすることで整理され、現在いろいろな部分でスムーズに連携
が行われるようになってるかなと思います。

基礎学力に関わってですが、今年度の中学3年生の全国学力学習状況調査では確かに課題がありました。今までで一番というわけではないかなと思いますが、課題がありました。先ほど言ったように学校間での違いもあります。それから年度によつての違いもあります。ですので、一概に飯田市の学力が低くなっているとか高くなっているというふうに一概に言えない部分が多くあるかなと思います。

ちょっとあり方の方とはずれてしまうかもしれないんですが、授業について学力については、今年度先生が一方的に黒板に書いて教えていく、それを子供たちがただメモを取って学習していくという学びではなく、子供同士が自分の考えを出し合いそれをお互いに確認しながら意見交換をして自分の考えをより深めていく、あるいは正解ではない納得解をみんなで導いていくという、今そういう力が要求されていますので、授業もそういうふうになるように授業改善を進めなければいけないということではいろいろ取り組んでおります。

またそれに関わって、ICT、タブレットの活用が子供同士が情報交換するときにはすごく有効なものですから、タブレットを活用してそういったところを授業改善する、あるいは今英語科はデジタル教科書が小学校5年6年、それから中学生も入っていますので、英語のデジタル教科書は特に個別最適化というか、要するに英語ですと例えば先生が発音して、その発音を生徒が例えば3回繰り返すとか10回繰り返すとか、今までだとそういう指導だったんですが、子供によってはその単語は1回言えばいいかもしれない。子供によっては何回も聞いて練習しなきゃいけないかもしれない。そういったときに、一斉指導ではそれができなかったんですが、デジタル教科書を使うと自分の弱いところを自分で自分の必要な時間だけ繰り返しできるということで、個別最適な学習に非常にデジタル教科書、英語のデジタル教科書は非常に活用しやすいものですから、そういったところを進められるように授業改善をして子供たちの基礎学力が高まるようにというふうに考えております。また基礎的読解力の力がやっぱり学力に非常に影響しているのではないかっていう報告がありますので、基礎的読解力を高めるような取り組みも今現在取り組んでいるという状況です。以上になります。

後藤会長 ありがとうございます。小中連携また一貫教育っていうこの視点で見たときに、もちろん課題はあるだろうけれども、具体的な改善点が見られるっていうことを今お話をいただきました。よろしいですか、山崎委員さん。

山崎委員 はい。

後藤会長 どうぞ。はいどうぞ。

小澤委員 今オブラートに包まれたような答弁をされたんですけど、実際のところ自分ちょっと気になってるのは、不登校の人数が減ったって言うんですけど、どのぐらいに減ったっていう具体的なものを。それともう1点はですね、その不登校のきつとに面接とかいろんなことをして思うんですけど、一番多い理由は何ですかね。学力が追いついていかない、学校行ってもしょうがない、いじめに遭ってるからとか、こういうことなんですかね。そういう分析っていうのはしてないのでしょうか？

熊谷教育長 ちょっと3ページの資料の表現が言葉足らずだったかなということをして今反省をしておりますが、小中連携・一貫教育が始まる前の課題がまさにその不登校と学力低下ってということで、それぞれ実際に小中連携・一貫教育では最初はできるところから始めましょうということでも、それぞれ実際に小中連携・一貫教育では最初はできるところから始めましょうということでも、緩くスタートしたんですけども、そういう中に今、今井専門幹が言ったような教育支援指導主事の働きかけもあって不登校の数が減り、学力も改善したっていう状況がございます。しかし近年はコロナ禍もありまして、不登校は実際増えております。急激に増えているっていうのが現状です。

それはいろんな原因が今分析中で一つではないんですけども、もう大きな原因とすると、不登校、学校行かなきゃいけないっていう感覚が非常にそうではなくて、学校行けなくても悪くないというような文科省の考え方も出てまいりましたし、学校へ行くことが一番のベストってということではなくて、その子その子にとっての居場所があって、そしてその子が社会的自立に向けて活動できることが一番大事だというふうに価値観が少し変わってきていることも大きいかなというふうに思っています。ですのでこの表現でいうと今改善したっていうふうに読み取れてしまいますが、そういう小中連携が始まったことによって不登校、学力が一時的に良くなったんですが、それがまた最近では不登校が増えている。今年は学力については昨年に比べて課題はあるんですけども、大きな流れで見ると改善している部分とか、あるいは全国学調だけではなくてその他の部分の学力ということも含めていくと、様々な取り組みの中で変化が起きてきているというふうにご理解をいただければありがたいなというふうに思っています。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。その他ありますか？ はいどうぞ、下平さん。

下平委員 飯田市が小中の流れの中で子供を育てようという考え方は非常に良いかと思うんですね。何でいいかっていうと、やっぱり発達って連続性があると思いますし、やっぱり流れの中で子供を育てるって非常に重要だと思うんです。これを活かせるのってのは逆に言ったらすね、発達ですね。学力的な発達の早い子は逆にこの流れに乗せて同じ学年じゃなくても少し、例えば小学校6年生でもですね中学校1年生のことを教えてもいいだろうし、逆に中学校でできなかった子は小学校のことを教えておいてほしい。こういう縦の流れをぜひやっていただきたいなというふうに私は思うんですね。

それと同時に横の流れなんですけれども、同じ学年でもやっぱり勉強のできる子とやっぱりなかなか苦手な子がいると思うんですが、それを同じクラスで同じように教えているっていうのが今の状況だと思うんですけど、これは効率的に効果的に学力を上げる方法って、例えば言ってみればですね、勉強のできるグループ、ある程度できるグループ、なかなか苦手なグループで分けてですね、その中で教えると先生たちの負担も少ないでしょうし、出来ない勉強が苦手な子に対してもやっぱり集中的に教えられることもあるでしょうし、できる勉強が得意な子に対してより伸ばせる、そういう縦と横のそういう教育の、何て言うんですかね、変化できるような、そういう動きをこの小中の教育の中に確立をしていただけると、いわゆるなかなか飯田には私立の小中一貫校ってないんですけども、私立の小中一貫校が結局勉強の先取りをやっていって早く受験

に結びつけるっていうそういうことだと思うんですけども、そういったアイデアも一つ、この公立の小中の枠組みの中でぜひ検討していただきたいなというふうに私は思います。

後藤会長 ありがとうございます。これから話題が移っていく、いわゆるたたき台の柱になっていくものであるという、そのことで多分ご意見をいただいていると思います。この小中連携・一貫教育、これを柱にして飯田コミュニティスクールのこと、それからキャリア教育ですね、これ当然そこに関わるわけですので、そういう方向でこれを飯田市教育の特徴として据えていくってこと、このことに対するご意見だったと思います。はいどうぞ、大場委員さん。

大場委員 不登校の問題なんですけど、僕は小学生や中学生の野外教育のわんぱく冒険隊だとかそういうのにいろいろずっと長い間携わってきて、わんぱく冒険隊にも不登校の子供だとかが実際にたんですよ。不登校の原因は勉強ができませんとかそんなことじゃなくて、一番多いのは申し訳ないんですが先生が嫌だっていうのが一番多いんですよ、聞いてみると。実際に自分の孫たちがおって、3年なら3年までは学校に普通に友達ともうまくできとったと。4年になって担任が変わったら、一気に2人とか3人が不登校になった。こういう問題が出てくるといじめだとか勉強の問題なら解決のしようもあると思うんですけども、その先生が嫌だっていう問題になってしまると不登校についてどうやって解決するかってのはすごく難しい問題になってくると思うんだよね。不登校になったのは担任がどういう理由だか知らんけど1年で変わったとか、それで新しい先生が来たら不登校になっちゃったとかいうのを結構聞くんですよ。だからいろいろな事情もあるんだろうけれども、先生も担任したらある程度、教育委員会の事情があるんだろうけども、2年とか3年っていうのはやっぱりみてもらうような方向性でいかんと、あんまり担任が、うちの孫なんか6年の間に4回だか先生が代わったということがあるもんで、そこら辺あたりのやっぱ不登校の問題が出てくるのかなと思うんですよ。

もう一つなんですけど、学校の老朽化があると。10年後には28校あるうちの25校がもう老朽化というか耐震にかかってくる。予算だとかそういうのはあるんですかね。そういう問題が出てくると、どうしてもその学校をどうするかっていう問題にはっきりとなってくるんじゃないかと思うんですよ。それで全部の学校を残して云々という全部補強しなくちゃなくなるんで、そこらあたりも考えていかないと10年後に学校が古くなってしまっただろうというのとはなかなか難しい問題なんで、どこの学校を補強するのかとかそういう面もある程度出てこないとならばたたき台として出していくのにえらいんじゃないですか。

後藤会長 ありがとうございます。大場委員さんも既にそっちの方の話に入っている感じがちょっとしますけれど、今のことじゃないことで、このいわゆる特徴ということについてございますでしょうか？どうぞ。渡邊委員さん。

渡邊委員 ここに書いてあることを云々っていうよりは、これからの話を進めていく上でこの三つのことを柱にしていくんだとしたら、ここに書いてある内容では不十分だと思うんですよ。ここには、端的に言うとか何をやってることが書いてあるだけで、評価がきちっとできていない。不十分だと思うんです、ここに書いてあることでは。メリットデメリットっていう端的な言い方

をしていいかどうかわからないけど、やることによって良い点、それからちょっと欠けているとか足りないとか、現状でもそういうことがあるはずだし、あるいはこれからやろうとすることによって足りない点、デメリットの部分がこういうふうには解決されるとか、あるいはさらにこういうふうには伸ばしていける可能性があるとかといったようなことが、もう少しきちっと整理をされてない。これだけでは今出ているようないろんなご意見が多分腹に落ちない。これからいろいろ話を進めていく中で、今、現に通っている子供たち、あるいは保護者の方々、それからこれから通うであろう子供たち、あるいはその保護者の方々、あるいはこれは若干二次的になるかもしれないが地域の人たち、地域で小中学校に対するそれなりの思いってのはやっぱりあるので、そこをどこまで斟酌するかっていう問題はありますけれども、ただ地域の中のより多くの人にやっぱりそれなりに納得をしてもらって、応援してもらっていくっていうことを考えていくと、その柱になる部分についての記述とか説明が僕はここに書いてあるだけではとても足りない。さっき言ったようないくつかの視点でも足りないって思うんですね。ここに書いてあることを否定するつもりはありませんが、ここんところをもうちよっときちっと補強をして、トータルとして本当にいわば理念にしていけるんだっていうようなところを、より明らかにしてもらいたいというふうに思います。

それからあと、これは個人的な感想ですけど、これ始まったときから個人的にずっと違和感を持っているんですが、飯田型とあって、ことさら言うことの中身が実際何がどうあるのかが僕はちょっとよくわかりません。小中連携一貫も今こういう表現になっていますが、前は確か飯田らしいとあって何か頭についてましたよね。それは何っていうのがあって、言い方は良くないけど、そういう言葉で飾るといっていかイメージを作っていくよりは、中身の部分でもうちよっときちっと説明をしてもらいたいなって思います。それから2ページの背景のところなんですけど、さっきの下平委員さんとか他の方のご意見もそうですけど、やっぱり社会の価値感がいろいろ多様化してきている中で、義務教育といえども、なんていうのかな、6・3制っていうのに固定をして、その普遍性だけを追いかけるっていうことではなくて、さっきの不登校の問題もいろいろあると思いますけれども、いろんなアプローチが求められている。社会自体にやっぱりそういう背景があって、6・3制がいけないとは言わないけれども、もっと違う方法がないのかとか、そういう欲求というものもあると思うんですね、一つにはね。なので、ここに書いてあるのは子供の数の減少と施設の老朽化の話ですので、非常に外部要因って言うていいかどうかわかんないけど、環境的な要因ですけども、もうちょっと社会を含めて、子供たちが置かれてる状況みたいなことを考えたときに、より多様な展開っていうのが考えられてもいいんじゃないか、そういう視点っていうのもここにあってもいいんじゃないかな。そうしないとうんと悪い言い方をすると、子供の数が減ってきて、施設も老朽化してるから何とかしよう。それはそれで非常に大きなきっかけではあるんですけども、ただそれが全てになっていくと果たしてそれでいいのかなっていうところはちょっと感じます。まとめませんが、以上です。

後藤会長 ありがとうございます。特徴ということ、ちょっとこれまでの私の感想でいくと、今回が一番ある意味では皆さんが意見をいろいろお持ちだなってことを率直に感じました。今までも飯田市の教育の特徴ということを中心にみんなで考えてきたわけですけども、ここへ来て今様々な意見が出ているってことは、この特徴というのは、もちろん今ここで決めこれで決まった

という話じゃないですので、今渡邊委員さんからも補強した方がいいんじゃないかっていうようなこともお話がありましたし、背景のところも、物理的なことだけじゃない視点もあるんじゃないかというようなご発言が今ありました。

今、飯田市の小中連携一貫教育、これが一番の柱になってるわけです。これで様々な今出てきたことが、どのようになっていくかってことも含めて、今度はたたき台の方で具体的に実はそこにあります学園っていうこの考え方、中学校区を中心にした9つのという話をちょっと進めていきたいと思いますので、こちら絡めてこれからはご発言をいただきたいと思います。

熊谷教育長 2ページ3ページにわたりましていただいたご意見を真摯に受けとめたいなというふうに思います。ここにこういう背景等の特徴を載せた意図はですね、もちろんこの少子化がなくて老朽化しなければそのまま存続していけるわけなんですけども、そのことがやはり背景としてきっかけになっていることは間違いないというふうに思っております。それを新たに構築するにあたって、やはり今まで積み上げてきた特徴・良さをこれを土台にして新たな方向性を見出したいという意味合いでここに位置づけておるということでございます。3ページの評価も当然細かにしていかなければいけないということは受け止めてまいりたいなというふうに思っております。

後藤会長 ありがとうございます。それじゃ皆さん方たたき台の方へ関わって、現在の中学校区、中学校区ごとの小・中学校を小中一貫小中学校としての9つの学園にと、こういうたたき台になっております。いかがでしょうか？ご質問でも結構ですし、ご意見でもよろしいですがお願いします。はいどうぞ。

湯本委員 すいません。最初に確認させていただきたいんですけども、よく思い切った9つの学園ということをご提案していただいたなというふうに思うんですけども、学園っていうと、やはり先ほど施設分離型ってことですので、中学校部と小学校部があるかなというふうに思うんですけども、そのそれぞれ学園の中に今は既存の小学校と中学校が入ってるわけですけども、学園になった場合には、中学校部が1つ小学校部が1つになるというイメージなのか、それとも今の中学校部があつてあと小学校が今ある学校がいくつかあるっていうふうなイメージをすればいいのか、ちょっとそこだけ教えていただけると、と思います。

後藤会長 6ページにかかわりますか。

湯本委員 はい、そうです。

後藤会長 それじゃ事務局どうぞ。

事務局・福澤課長 こちらのイメージ図にございますが、それぞれの9つの学園の中にそれぞれ1つの小学校と1つの中学校にするということのイメージではございません。複数の小学校がありますので、例えば飯田東学園でいきますと、飯田東学園飯田東中学校があり飯田東学園浜井場小

学校があり飯田東学園追手町小学校があり、そういうイメージでございます。現段階ではこういうことですが、その次の段階といたしまして、それぞれのこの学園で進むということになればそのこの学園の中でのまた議論ということも出てくるかとは思いますが、今の段階でのご提案をしているイメージはそれぞれの今ある中学校小学校を中学校区単位で学園とすることを想定しております。

後藤会長 湯本委員さん、どうぞ。

湯本委員 はい、ありがとうございました。イメージはそれでつかめました。先ほどから出ている小中連携一貫のことで、今までやっぱり 12 年間積み上げてきたものが飯田市はありますので、その上に立ってこういった 9 つの学園で構成していくのは非常に意味があることだなというふうに私は思っています。

それで先ほどからいろんな質問が出ているわけですけども、現場の肌感覚としてちょっと意見を言わせてもらってもよろしいでしょうか？まずこの不登校のことなんですけども、中一ギャップと昔言われていました。そしてその頃っていうのは、平成 23 年度前はどうなったかという、本当に小学校が中学生になってきて、私は当時中学校で教員をやってまして、中学校 1 年生の 1 学期をどうやって乗り越えさせるかってことにすごい神経を使ったんです。そこがすごい大変なんです。生活が一変しまして、教科担任制になって、それで部活動が始まって、宿題はそれぞれ当たり前のように出ましたので、それをやりながら連休明けから 1 学期の夏休みまでどうやって中学生を乗り越えさせるかというのがすごいプレッシャーに感じた担任としての思いがあります。それが今は小学校から中学校に来て体験入学することが当たり前になってますし、それから中学校の教員が小学校へ出かけて授業をするということも当たり前のようにやっています。ただそこでもう入ってくる前に、小学生が相当中学校のイメージができてるなというふうに思います。そこでギャップが相当減ってるなというふうに思います。

それから不登校の数なんですけども、私は中 1 ギャップっていうことはないというふうに思ってますけども、中学校とかそういった連携があるからこそ、中学校 1 年生になって、先ほど言ったように中学校の 1 年 1 学期は苦しいっていう思いを中学生はしてないと思います。だから、中学校 1 年生で、昔は本当にそこでボンと不登校が増えたんですけど、今はそんなことないです。どこの学年でも同じようにいるって感じでそこだけが突出しているっていうことはないです。ただ全体的にどの学年も小学校の段階からも増えてきちゃってて、結果としてトータルとして数が増えるような現場の感覚です。

それから、学力に関しては、例えばうちの緑ヶ丘中学校区でいうと、2ヶ月に1回ぐらい研究主任っていう授業を一番考えている職員がいるわけですけども、それが中学校と小学校の研究主任同士が集まって授業でどういうことを気をつけて取り組んでいこうかということを実際すり合わせをしています。緑ヶ丘中学校区ではこういうところを気をつけて一緒にやっという。今年一番話題になっているのは、家庭学習どうしようかってことを考えています。実は中学校と小学校で考え方が全然違ってて、それをちょっとすり合わせで研究主任同士が苦勞しています。でもそこはやっぱり同じ中学校区ですから、やっぱり同じ目標を持って上がっていくことによって、やっぱり子供たちの学びに差が生じなくなるってことで、やっぱりそこでもギャップがなく

なって学びやすくなっていくことを思っています。それでそのようなことをやっぱりやっ
てられるのは小中連携・一貫教育のおかげだなというふうに思っています。ですので今までやっ
ぱり 12 年間取り組んできたってことっていうのは、目に見える点数っていうのは年によって違
うわけですけども、確実にある意味としては定着してきていると思います。小中連携教育を小中
一貫型の学園をメインにするっていうのは今までの中の流れからしても非常にイメージしやす
いし、こういう方向がいいんじゃないかなと私は思いました。

後藤会長 ありがとうございます。中学校現場の委員の方からなんですけれども、小林委員さん
小学校の方からするとどうですか。

小林委員 はい、お願いいたします。今、だんだんに具体についていうことになりましたので、前半
のお話をお聞きしたんですけど、私も自分の本当に個人的な経験や今の具体なところから感じ
てることをお話させていただきますが、やはり私も飯田市の小中一貫、このずっと 12 年きた
ってこと、これは本当に飯田市でずっと教諭をやった私の中で手応えというか、そういうものを感じ
てます。

実は個人的な話をさせていただくと、私は平成 24 年から 5 年間、ここでいうと竜東学園区、竜
東中学校区で一般の教員をやらせていただいたんですが、ちょうどやっぱりそこが変わり目だ
ったんですよ。今の緑ヶ丘中の校長先生がおっしゃるようにそれまでの感じとは全然違って、私
が行ったときに、その竜東学区ではですね、この小中一貫に積極的に取り組もうという地域だ
ったんですけど、ここにある学校の子供たちが集まって「ふるさと夢学校」という取り組みを
したんですが、農家民泊を各校の高学年が一緒になってグループ分けして、そこにいろんな学校
の小学生が、ここで言えば上久堅の子と千代の子と千栄の子、龍江はこの時入っていなかったん
ですけど、そういう子供たちが同じグループになって民泊する。それを学校区で連携をとってやる
んですけど、それまで教員の立場で言うと、こういうのは子供が恥ずかしがって何もできない
んじゃないのって思ったんですが、これが違うんですね。生き生きするんです。どうしても私達自
分の目から見ちゃうんですけど、子供の立場になってみると人とつながることってこんなに楽し
いんだなっていうことをそのとき実感したんですね。

あの学区では竜東中学校区を中心に「ふるさと竜東の集い」というのも行いまして、そこ
では中学生がリーダーシップをとって小学 6 年生を集めてくれて、ふるさとについてね、小グル
ープでいろいろ語るんですね、自分たちの地域のことを。これも 6 年生あるいは中学生にとっ
てもふるさとを見つめ直すとてもいい経験になっていて、なんか子供にしてみるとそういったこ
でいうつながりのある学園構想っていう中で育つのは楽しいんだなっていうことを思いました。

それまで私が育ったときは、競い合うというか、もう例えば、高森には負けないぞとか、東
には負けないぞとか、そういう何か自分の学校でっていう育ちをしてきた気がするんですけど、今
はやっぱり時代が違って、やっぱりつながる楽しさ、そういうことを子供たちが感じるのかな
と思います。今の学校でもですね、つい最近、丘の上の 5 校で音楽会をしたんですね。これもと
っても私は子供たちの姿が生き生きしてて、自分もそれを見てて良い会だなっていうふうに思
うんですけども、各小学校の 3 つの小学校ですね、浜井場、追手町、丸山、それから東と西が
集まって音楽会をしたんですが、各校の校歌をまず歌ってね、それから各校の学校紹介をし合

んです。そして一曲また違う曲を歌うんですが、こういう中で子供たちはやっぱり何かお互い別の学校の校歌を聞く楽しさとかね、興味を深めたりとか関心を持ったり、そういう中で子供たちはやっぱりそこもつながる喜びっていうか、そういうことを感じているように思います。です。ですのでこうした構想は12年を踏まえてこの構想はいけるんじゃないかなっていう実感は個人的には持っております。あと不登校の点でいってもやっぱりそういうつながりをしてたので、前の学園、竜東中学区にも担任しているお子さんの中にはちょっと心配なお子さんもいたんですけど、やっぱり子供同士がつながっている関係で、そういう心配なお子さんも順調に学校生活を送っていくっていうような事例も持っています。

後藤会長 ありがとうございます。子供たちは12年の間に既にこういうイメージを子供たち自身が持つてるような今お話がありました。はい、山浦委員さん。

山浦委員 事務局からこの「9つの学園」構想、ビジョンが見える形で提案され、どうやって未来図を描いていくのかの具体的な方向性が示されたと受け止めています。私は高陵学園の一人ですが、先ほどの渡邊委員さんのお話を聞いていると、構想で示された高陵学園に所属している私は、現在、上郷小学校や高陵中学校で行われている教育活動や施設などを理解したうえで、学校を核として地域づくりをしていくために、どのようなアプローチで高陵学園を構想すればいいのか考えなくてはならないと思いました。そのためには多様な視点での現状分析を高陵学園で行うことが大切になると感じています。

その中で高陵学園という個別の学園を考えていくときに、今回4つの基本理念が示されました。その4つの基本理念の基盤は「つながる」というキーワードと理解しましたが、一つ目の学園内にある複数の小中学校をつないでいる小中一貫教育ですが、これからは幼稚園保育園もつなぐことを考えなければと思います。幼保のつながりをこれからは作っていかなければいけない。これは先ほどの渡邊委員さんが言及した様々なアプローチの一つだと思います。今までは小中学校を中心に考えてきたけれども、これからは幼稚園保育園、そして高等学校も含めて15年間をどういうふうに描いていくのかが必要じゃないかと考えます。それから基本理念の二つ目には、やはり地域とつながるコミュニティスクールというのがあります。それから基本理念の三つ目には、その教育活動がつながるといって、切れ目のない学びの特設カリキュラムを作りながらその探究心を醸成していくようなキャリア教育なんだというのが位置付いています。

「つながる」というキーワードでもう一つ足りないのは私は「未来」へつながることだと思います。これから飯田市はリニア時代を迎えるのでリニア時代へとつながることが入ってきた方がいいと思いました。その時に学校施設がどうあるべきかという議論が生まれ、魅力ある学校施設の整備をどうするかということを考え始めると思います。学校施設の整備はリニア時代にどうあればいいのかがあっていうところは、ただ新しい建物を建てればいだけじゃなくて、既存のものを活用しながらその地域の特色にあったものにしていくという発想も大事だと思います。ですから未来軸の中で、やはりその時間軸の中でのつながるっていう理念が、この4つの理念の中に含まれてくるのがとても大事なことじゃないかと思います。これから、各学園内で意見交換をしながら、自分たちの学園はこういうビジョンを作っていこう、未来図を作っていこう

ということになると思いますが、未来につながるということも学園内での議論の視点になってくると思います。これらの視点で私たちは議論を深めながら、どのように構想すればいいのかって動き始めと思うので、この基本理念の内容についてももう少し練っていただくとより良いものになるのかなと感じました。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。9つの学園のこのイメージが実は一番最初に話題にした課題のあるいは背景となっているもの、これみんなこの学園で違うわけですね。校舎一つ取ってみても。そういう動きのところの一番のベースになるイメージとして、9つの学園という構想という位置づけだろうと思いますけれど、はいどうぞ、お願いします。

玉置委員 南信濃の玉置と申します。先ほど9つの学園のイメージを福澤課長さんの方で説明をしていただきました。そして飯田東学園のことを説明していただいたんですが、私は遠山郷の学園のことを考えると、この説明では、私達の地域は、何て言うんですかね、当てはまらないっていう感じがします。というのは、飯田市を取り巻く背景、これは何にもこういう形だと解決できないと思うんですね。そこら辺を、例えば4番の施設配置計画っていうことも、もう少し小さな地域のことも考えた考え方を出示していただきたいなと思います。それからもう一つは、また元に戻りますけども2ページの学校施設の老朽化というところで、学校はですね、28校のうち12校が国の改築目安とされる築後50年をもう経過しているということなんですが、私どもの地区の和田小それから遠山中がどの程度危険なのか改築が必要なかっていうことが、地域でわかっていない。いろんな議論をしていく中で、でも学校行けば中はものすごく綺麗だし危ないっていう感覚がない。具体的にですね、どのように危ないのか、これがもう5年、10年もたないのかっていうようなことも情報としてもらえると、資料なんかで提供していただくとありがたいかなと思います。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。坂野委員さん井出委員さんの方でちょっとご発言いただけるとありがたいと思うんですがいかがでしょうか？

坂野委員 今聞いていくつか考えたことがあります。前回のときにも説明をさせていただいたところで、小中一貫教育ということのメリットとデメリットについては2016年に出された文科省の資料の中で実は示されております。そのことについてはこの前のスライドのパワーポイントのところの9枚目10枚目のところに実は書かせていただいたんですね。先ほどのご意見の中で、簡単に言うと議論をするために良いこと悪いことをちゃんとまとめてくださいっていうご意見だったかなというふうに思いますので、もし可能であれば、そういったものも含めて個々のところでちょっと枚数が増えてしまうかもしれませんが、いわゆるたたき台の中にそれを組み込んでいただけると、実際に各学校の方々、関係者の方たちに議論をしていただくっていうときに、こういったメリットやデメリットが確かにあるよねっていうことについて理解を深めていただきやすくなるのかなというふうに思います。

先ほどのご意見の中で幼保を含めてというご意見があったかと思うんですけれども、これはまさに本当に必要なことで、東京とか神奈川県を回ると実は幼稚園とか保育所が10校

20校30校から小学校にきますっていうみたいな話で、なかなか連携しようっていうのも実際にはかなり難しいんですね。ただ飯田市さんの場合は、ある程度居住地域のところに決まった幼稚園保育所こども園等があって、それでもうだいたい学区とほぼ一致してるよねってことであれば、まさにさっきご提案があったような形で進めることっていうのはできるのかなというふうに思います。

あと私の方でもう1つ加えるとすれば、先ほどつながるってところがありましたけれども、その際にですね、地域・学校・家庭がつながるってところに関わると思うんですが、学童保育等ですね、学校の時間が終わったあとの子供の居場所みたいなものも合わせて、本当に子供たちがずっと成長していく中で関係するところがみんなそこにつながってますよねっていう形のこと。がうまくメッセージとして伝えられると、その実際につながっているまとまりというか組織というか場を作っていくためには、どういう形のことそれぞれの地域でいだろうねっていうことの議論をしやすくしていくことができるのではないかなと思います。どうもありがとうございます。

後藤会長 ありがとうございます。井出委員さんいかがでしょうか？

井出委員 先ほど基本理念に関わる部分のところで検証が十分されていないというご指摘がありました。私もこれはとても大事なことだと思います。なぜかといいますと、最初に提示された飯田市立小中学校における教育の特徴1, 2, 3。ここにまとめられていることがそのまま小中一貫型小中学校としての9つの学園の基本理念としてスライドしています。今後、多くの人にこの部分を理解していただくためには、もう少し最初の特徴のところを丁寧に分析して、何が成果で何が課題で何が問題かっていうこともわかりやすくまとめておかないと、この基本理念が生きてこない。そういう意味で先ほどの委員の方の指摘を受け止めて考える必要があると思いました。

それからもう一つは、学力のお話が出てましたがここが一番難しいところで、学力観の共有を進める必要があります。国や文科省は様々な施策を各市町村に降ろしてきます。学校はそれを受け止めてこういう子供を育てていきますっていうふうに教育を展開するわけですが、実は子供の側から出てきたものでもなければ、保護者や地域の思いを形にしたものではないっていう部分もあるわけですね。例えば一番わかりやすいのは、最近議論されている主体的で対話的で深い学びです。これは子供の側から出てきたものではなくて、大人つまり国や社会全体がこれからの子供に必要な資質能力としておろしてきたもので学力調査などをしていく上で、保護者の望む学力と、子供自身が高めたいと思っている学力と、それから教育委員会や社会が求めている学力と、これがなかなか折り合わないことがあります。ですから学力の中身について理解を深めていく受け皿を作っていく必要がある。それはやっぱり学校だけでなく、CS（コミュニティスクール）のような場であったり、学園をもし作っていくとなれば合同のCS等で時間を割いてどんなふうにしていこうかっていう議論を積み重ねていく必要があるかなとあらためて思います。そういう意味では、最初のところの教育の特徴、学校・地域・家庭が目指す子供像を共有し、これは単なるお題目にしないで、どんな学力を備えた子供にしていきたいのか、どんな資質能力を持つ子供にしていきたいのかっていうことをみんなで話し合っていく場を作っていく必要があると思います。そういう取組みの先に今後進めていこうとしている学園構想も具体的に見えてくる。そうい

うことをしていかなないとすると、いくつかの学校が集まって検討を進めていく意義もなくなってしまいかと思いますので、ぜひ受け皿をつくってみんなで議論に参加していくことに挑戦していったらいいなと思いました。大変深い内容をもった指摘がいくつもありましたので、私も今後こういったことを皆様と一緒に考えていかなければならないということを改めて思ったところです。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。副委員長さんが私ほぼ同じ年齢なので、先ほどキャリア教育の一番の元が中学校のいわゆるキャリア教育っていうお話がありましたけれども、この12年のキャリア教育について、ちょっとまだ今日話題がほとんどキャリア教育の方には行かなかったので、何かお話することがあればお話をいただいて今日のところの締めをしたいと思ってるんですがいかがですか。

田添副会長 最後で。

後藤会長 わかりました。閉会のところで触れていただくようにしたいと思います。時間が来ていますけれども今日様々な意見をいただいて、また、(渡邊委員：ちょっといいですか) はい、どうぞ。

渡邊委員 4ページ5ページ、あるいはそれ以降のページにもちょっとつながるんですけど、書き方が曖昧なところがあるので、これから進めていく上での選択肢としてどういうふうに取り上げていったらいいのかなというところが一つあります。4ページのところには小中一貫型小中学校として9つの学園についてということが書いてあって、その下の四角の中の2の二つ目のポツの一番最後のところに、また義務教育学校の選択肢も合わせて検討するというふうに書いてあるので、ここら辺が非常に議論が曖昧というか、一番上では小中一貫型小中学校を前提としますって書いてありながら、他の選択肢もいよいよというふうに書いてある。僕はいろんな選択肢があった方がいいというふうに思ってるので、一番上のこの四角のところを、小中一貫型小中学校としてというところを、何かもうちょっと違う表現っていうのができないのかなと。あと、次の下の2番の施設配置形態ってところに、当面は施設分離型とするっていうに書いてあるんだけど、多分これでは話は何も進んでいかない、極端な言い方すると。施設一体型に全部しようとかっていう意味ではなくて、この5ページ、あるいは7ページまでのところをきちっといろいろ説明していく中で、前提にあったその学校の物理的な問題とか、ひょっとしたら子供たちの数の問題とかも含めて、いやうちは施設一体型っていうのを選択したいな検討したいな、あるいは前日も学識の先生方の方からお話がありました、義務教育学校っていう選択っていうのももっと検討したい。ただ5ページのところを見ると、施設の手続きで教育委員会の規則ですむのと市の条例にしなきゃいけない。行政的な手続きはちょっとハードルが高いんですけども、いろいろ考えていく上でより選択肢が多い、自由度が多い、あるいは6ページの基本理念に謳ってるような、僕はこれを否定するわけではないので、説明が足りないというふうに申し上げてるだけなので、可能性をより増やしていくっていう選択肢として考えた場合に、その施設のあり方っていうのも多分いろいろある。なので、そのところはもう分離型だよっていうようなことで、あんまり縛っちゃ

わない方がいいんじゃないかな。ただ、これからそれを地区でどういうふうに投げかけていくんだっていうやり方の問題はありますけれども、というふうに思います。

今度、まちづくりの委員長っていう立場からいくと、やっぱりある程度期間を区切りながら検討していかないと、当面はみたいな言い方をしていくと、ズルズル進んでるだけで、例えば1年というのは乱暴かもしれないけど、そこまでに例えばどこまでの結論に達するのか。達しなければいけないってことではなくて、ある程度目標みたいなものも置きながら、地区の中でいろんな議論をしてもらおう。あるいはさっきの義務教育学校みたいな話が出てきたら、教育委員会なり何なりとやり取りをしながら、大変なんだけど、いろんなアプローチやっけていかないと、飯田市これだけいろんな地区がいろんな学校があってという中なので、一つのやり方ってのはなかなか難しいんじゃないかなというふうに思います。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。その他ご発言ありますか。

井出委員 今のご指摘は大変奥行きのあるお話です。そういうふうにしていくとまとまらなくなるかもしれないという危惧があるかもしれないのですが、先ほど出された指摘の中に、学びの早さの違う子供をどうするかというご指摘がありました。それから、発達の段階に合わせて6・3制ではなくて、4・3・2制といったものも考えられるというお話がありました。個人の成長の違い、それから学年という集団の組み合わせ方、そんなことを考えていくと、先ほどの学力もそうですけれども、当然学校の在り様に触れていかざるを得なくなっていくんですね。

それからこれは仮の話ですけれども、中学校が1つに小学校が4つのグループがある一方で、小さな地域の中に中学校が1小学校が2という形のところのように、一つの学校にまとめて小中一貫型の一体型の校舎を作るとした場合、わかりやすい組み合わせになる地域もあるわけです。先ほどの義務教育学校にするのか施設一体型にするのか、あるいは連携型で縦の連携、横の連携を深めていくような形でいくのかっていうことについて、今後各地区議論を進めていくときに、私達の地区はどんな形を追求していこうかっていうことは必ず出てくる時期があると思います。ですから、そんなことも事務局では頭の中に入れながら、資料の提供や情報提供をしていく必要があるかと思えます。以上です。

後藤会長 ありがとうございます。その他よろしいですか。それでは今日のところは時間の関係でちょっと過ぎてしまいましたけれども、このあたりにしておこうと思えますが、よろしいでしょうか？

それでは「(3) その他」についてですけれども、皆様から何かありますか。特によろしいでしょうか？それでは「6. その他」の方に進ませていただきます。次回第5回審議会の内容について、事務局からお願いできますでしょうか？

6 その他

事務局・倉田係長 本日は皆様非常に貴重なご意見をいただきましてありがとうございます。第5回審議会の中では、本日いただいた意見を踏まえてこのたたき台を充実させていただきながらさらに議論を深めさせていただければと考えております。またこの審議会任期として2年という

形でありますけれども、この9つの学園を作っていくという構想を、一旦可能であれば今年度の内に第1回目の答申という形でまとめられるような動きができればというふうに考えておりました。またそういった部分も次回の第5回審議会の中で議論を深めていただければと考えております。よろしくお願いいたします。

後藤会長 どうもありがとうございました。それでは事務局の方にお返しをしたいと思います。よろしくお願いいたします。

7 連絡事項

進行 大変貴重なご意見を本日はいただきまして誠にありがとうございました。また後藤会長さん円滑な進捗をいただきまして誠にありがとうございました。第5回の審議会の開催予定につきましては事務局から先ほどお伝えした通りでございます。第5回の審議会の開催予定は年が明けますが1月23日火曜日の同じ19時からということで予定をしておりますのでよろしくお願いいたします。またその他、全体を通して何かご質問等がございますでしょうか？

小澤委員 この6ページのね、ここの部分が前のイメージというところの、学校の今の現在の人数ですね。これを明記してもらおうと。例えば遠山郷の学園は一体にするのはどうか、このようなことも判断ができるってこういうこともあると思うんですけど、いかがでしょうか？

進行 はい、ご意見ありがとうございます。次回の資料といたしましては、それぞれの現在の小学校中学校の横に児童生徒数を明記して資料を作成してまいりたいと思います。また大変申し訳ございません。言葉足らずの説明の中でそれぞれ読み取っていただいた部分もございますし、またそれぞれの中学校区の規模によりまして、当然どのような状況が状態が良いかということもまた議論を進めてもらえればと思いますのでよろしくお願いいたします。

ここでお示しをしました小中一貫型の小・中学校、一番は先ほど前向きな提案がなかなかないというご意見もいただきましたが、特色のある学びを9年間一つの柱として小中一貫型の学校の中で進めていくということが一番の柱でございます。今はともするとですね、学校の先生が異動をされるとその先生の熱量によって若干のばらつきが出たり、あるいは地域の役員の皆さんが交代されるとそこでまたばらつきが出たりということもございますが、そういったことがなるべく起きない9年間のそれぞれの中学校区における特色のある学び、特色のあるカリキュラムをきちんと作っていきたいということは一番のもとにあることでございますので、その点も申し添えたいと思います。

時間が過ぎておりまして大変申し訳ございません。それでは閉会としたいと存じますが、閉会のご挨拶を田添副会長よろしくお願いいたします。

8 閉会あいさつ 田添副会長

第4回目の審議会ですけれども本当に積極的なご意見等ありがとうございました。それからリモートで参加していただきました坂野委員さん、井出委員さん、どうもありがとうございました。

今日は今までやってきた小中連携・一貫教育のその上に立って、今日示されたのは小中一貫型小中学校という連携一貫からさらにバージョンアップして、一貫校であるという学園構想の中に入ってきているんだけど、小中一貫型小中学校ということで、今までやってきた一貫教育をさらにバージョンアップして一歩先に進めようとする、ある面では積極的な提案ではなかったのかなって個人的には受け止めております。

しかしながら今までやってきた小中連携・一貫教育の成果と課題あたりがまだまだ明確でない中で、どうバージョンアップしていくのかなってところがまだ見えてないところですけども、やはり学園構想になってきた場合には、皆様がどうイメージされたかわかりませんが、やはり学園の中にはやはり学園長がいて、当然学園としての教育目標があるはずなんです。そこは今やっている中でも当然作りながらやってきてると思うんですけども、学園としての教育目標って当然あるはずなんです。そこんところをどうみんなで作りに上げていくのかなってあたりが大きな課題になってくるんじゃないかなってことを思いますし、あと手法的に言えば、やはり今課長さんが話したように9年間つなげたカリキュラムってまだなかなかできていない面もありますし、あるいは小中の乗り入れの問題とか今まで連携一貫でできなかった部分をどう入れながら、さらに課題であった生徒指導の問題、学力の問題にどうつなげていくのかってところ、これから具体的にその学園構想は全然出てきていないので、そこら辺が具体的にしていけば、今までの成果の上に立ってどう学園を構想していくのかなってのが見えてくれば、より具体的になっていくのかなと思います。

私とその学園構想に出会ったのは平成23年に三鷹市の学校訪問をしたときです。あそこは全部学園構想になっていました。学園構想ってことで、要するに地区をベースにしながら1つの中学校とそこに関わる小学校で学園ということで。うんと大事にしていることは、その地区のコミュニティを非常に大事にして、それをもとにして作り上げていく学園構想でした。学園長がいましたし、学園の目標はありましたし、学園歌もありましたし、それから校務分掌も各学校全部同じような校務分掌で、いざ何かあったときは各学校校務分掌が同じですので緊急的に会議を持って横の連携が非常に取りやすいとか、相互乗り入れで全職員が中学校の先生は小学校をみる小学校の先生は中学校をみるっていう、かなり先進的な学園構想、学園を運営していました。それを見たとき非常にすごいなと思って、やはりこういうのは将来的にはあるのかなと思って、今から十数年前ですけどもそういう事情を見てきました。ようやくここで学園構想が出てきたから、やっぱりそういう向きに変わったのかなっていうことを感じました。

やはりこれからの小中連携、小中一貫型小中学校のあり方をやはり深く研究していった先には、さっき言ったどういう学校のあり方、要するに施設一体型なのか施設分離型なのかあるいは義務教育学校なのかっていう、小中一貫教育を詰めていった先にはそういったものが見えてくるんじゃないかなっていうそんなことを思いながら、やはり今の議論をもっと深めていけば、先が見えてくるんじゃないかなっていう、そんなことを感じさせていただきました。

それからキャリア教育に関わっては、もう既に小中一貫のカリキュラム等を先行して平成23・4年あたりにそういうものを作った基のベースがあります。それを作るときにも、小中一貫の各学校、中学校区ごとに集まっていただいて、そこで小中一貫のキャリア教育の目標等の設定をしています。そういった経験もあるから、そういった経験を生かしながら、さらにその学園あたりを充実させていけばつながっていくんじゃないかなと、そんな感想を持ちました。

すいません。少し長くなって申し訳ありませんでした。以上をもちまして第4回の審議会を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。